

2024年度

コミュニティアワー報告会

プログラム・レジュメ集

とき 2024年12月17日(火)14:40-17:50
ところ 関西福祉大学 A100大講義室

誰も置き去りにされない

社会の創出をめざす
課題**解決型**授業

～**舞台**は地域、最後の一人に
寄り添い最初の一人へ～

2024年度

コミュニティアワー報告会

タイムテーブル

オープニング

14:40～14:55

原ゼミ 地域の「ワカラナイ」をなくす
- 見て・聞いて・調べて・やってみた -

15:00～15:20

熊野・水野ゼミ 姫路城大天守登城支援

15:25～15:45

谷川ゼミ 地域とつながる、人とつながる
- 私たちの活動が紡ぐ新たな関係性 -

15:50～16:10

萬代ゼミ ちっぽけな僕にできること

16:20～16:40

高田ゼミ 「Well-Linkプロジェクト」始めました！
- 知る・つながる・支え合う -

16:45～17:05

平林ゼミ 現代の精神保健福祉
～人々をつなげるシルバーリボン～

17:10～17:30

クロージング

17:35～17:50

報告概要



原ゼミ 地域の「ワカラナイ」をなくす - 見て・聞いて・調べて・やってみた -

街頭インタビューを通して、子ども・環境・移動の3つをテーマにして活動しました。子どもでは、子ども食堂のお手伝いやお菓子の販売、環境では海岸清掃、移動では高齢者疑似体験の活動を行いました。



熊野・水野ゼミ 姫路城大天守登城支援

本報告では、最重度の障害がある方の姫路城天守閣の登城支援を通じて、「誰かの、やりたいけど、できないこと」を支援することを体験し、私たちが見ることができた景色、学んだこと、得た経験を紹介するものである。



谷川ゼミ 地域とつながる、人とつながる - 私たちの活動が紡ぐ新たな関係性 -

私たち谷川ゼミは、車いす利用者向けマップ作成、高齢者の健康増進、路上生活者の炊き出し支援、生活困窮者支援などに取り組んだ。これら地域における多様なニーズに応えるための具体的な活動を紹介し、その成果を報告する。

萬代ゼミ ちっぼけな僕にできること

私たちは石川県輪島市で災害復興支援を行った。現地に足を運び活動する中で、メディアでは知り得ない災害の恐ろしさを目の当たりにした。この経験を通じて平和な日常の有難みを再確認し、今私たちに何ができるのかを報告する。



高田ゼミ 「Well-Linkプロジェクト」始めました！ —知る・つながる・支え合う—

高田ゼミでは、様々な立場にある人同士が、地域の中でお互いを知り、つながり、支え合う意識を育むことを目的とした「Well-Linkプロジェクト」に取り組みました。児童養護、障がい、子育て分野の3つの活動について報告します。



平林ゼミ 現代の精神保健福祉 ～人々をつなげるシルバーリボン～

皆さんが知っている精神疾患の知識は正しいですか？若者に対して精神保健福祉に関する正しい知識を伝えていくことを目的に活動しました。当日は「世界メンタルヘルスデー」に合わせて実施した啓発イベントを中心に報告します。



地域の「ワカラナイ」をなくす

-見て・聞いて・調べて・やってみた-

街頭インタビューを基にした活動

テーマを設定するために、地域にどのような**ニーズ**があるのか調査を行った。

調査では、医療、子ども、環境、高齢、交通の問題など多岐に渡った。

その中で昨年度から行なっていた**環境**（海岸清掃）、**子ども**（かんぷくキッチン）に加え**移動**をテーマに設定し、年間を通して下記活動を展開した。



原ゼミのあゆみ

5月

かんぷくキッチン①



6月

ゼミキャンプ



7月

かんぷくスポーツデー



10月

海岸清掃



11月

擬似高齢者体験



11月

かんぷくキッチン②



12月

コミアフ報告会

3月

かんぷくキッチン③

子ども

かんぷくキッチンって何？

子どもにとって居心地のいい場、大学生にとって学べる場となることを目的として、2023年11月より開催している「こども食堂」。社会マネジメント専攻の有志グループ、「Social Management Group（しゃまね）」が運営をしている。2024年7月には、スポーツ福祉の構築を目指した活動の一環として「かんぷくスポーツデー」をスポーツ福祉専攻の開設を記念して、共同で開催。

どんなかわりを？

優秀なボランティアとして「しゃまね」のフォローをしながら、ジュース・アイス販売など原ゼミオリジナルな活動を行った！

かんぷくキッチン 5/21,11/12,3/25

- ・会場設営等
- ・子どもとの関わり(あそび・まなび・ごはん)
- ・子どものあそび相手
- ・写真撮影
- ・駄菓子の販売【3/25 実施予定】



かんぷくスポーツデー

- ・子どもの誘導、見守り
- ・配膳補助
- ・写真撮影
- ・ジュース、アイスの販売

参加した子どもの数

5/21 かんぷくキッチン	66名
かんぷくスポーツデー	108名
11/12 かんぷくキッチン	62名

ジュース・アイス販売の様子



継続して活動に参加して…

たくさんの参加者がいたことから活動は子ども達の居場所になっていると感じました。来てくれた子ども達の中には、「次のかんぷくキッチンも来るね」という声を言ってくれる子もあり、活動して良かったと思います。

駄菓子販売の経緯

赤穂市内に駄菓子屋が
少ないという意見を聞く

予行演習として、スポーツデー
でジュースやアイスの販売

利益で駄菓子購入して
販売しよう！！

かんぷくキッチンでの
販売を検討

利益出た！
5,750円

環境

赤穂きらきらプロジェクト

「**実践的公共論**」の授業で実施した活動から誕生！

海洋ごみの問題が赤穂に住む人々の生活に影響を与えていること踏まえ、海洋ごみの**調査・清掃活動**を行い、地域へ還元することが活動の目的である。

結果発表



ボランティア学生含む 30 人で 2 時間調査を行った結果

燃えるゴミ	7.35kg
プラスチック	3.9kg
ビン・缶・ペットボトル	5.2kg
キャップ	750g
牡蠣パイプ	5.0kg (約 7311 個)

ゴミの総量 **22.2kg**

*小学 1 年生児童の平均体重とほぼ同じ

気づいたこと

昨年もおこなって綺麗になったはずのゴミが大量に…

→このゴミは誰が掃除するのか…

赤穂は**牡蠣**の養殖が有名だが、それに使う牡蠣パイプのゴミを大量に出してしまっていた。

→生産者がどのようにしているのか、確認することが必要ではないか。

移動

播州赤穂駅で赤穂に住んでいる人たちに困っていることをインタビューしたところ、高齢者の方から「**交通の便が少なく免許返納をしたら生活ができない**」という意見があった。

高齢者の移動にまつわるアンケート等を確認する中で、そもそも「**高齢者が移動時にどのような困難を抱えているのかを確認するため、高齢者疑似体験を実施した。**」



なにをしたの？

社会福祉法人 赤穂社会協議会から高齢者体験キットを借り、それぞれ所定の位置から関西福祉大学まで歩いた。

結果は…



装備なしグループ

播州赤穂駅～大学(2700m)

39分(分速 69.2m)

『歩くのたのしい！大好き！！』



半装備グループ

赤穂中央病院～大学(2100m)

32分(分速 65.6m)

視界が制限されることで恐怖を感じる。

無意識のうちに筋力の弱い足を庇い、むしろ

利き足の疲労が大きくなる。



全装備グループ

パオーネ～大学(1300m)

36分(分速 36.1m)

腰がしんどく、自然と視線が落ちる。

間に合うと思った横断歩道が渡れない。

→とても危険！！

体験中は、右写真→の姿勢が

最もラクであった。



ワカッタこと・課題

子ども

子どもはあそぶ場所を求めている。
子どもと楽しんで遊んでもらうために自分たちの引き出しを増やすことが必要。
単なる“お手伝い”でなく、原ゼミとしてイベントの企画や駄菓子販売の継続が必要。

環境

牡蠣パイプをはじめとするゴミが一体どこから流れて来ているのだろうか。
自然分解される別のものに変えることはできないか、生産者への聞き取りなども含めて、調べていくことが必要。

移動

高齢者の移動にかかる負担は年齢などによって大きく変わるのだと身をもって体験した。
目に見てわかる重度の人への支援は充実しやすいが、中度や軽度の人への問題は発見されにくい。それぞれに合わせた支援が必要。

おわりに

活動に際してご協力いただいた関係機関の皆様、ボランティアとして関わってくれた学生のみなさん、ありがとうございました！

原ゼミ一同

石原 清楓、江口 実優、岡坂 健吾、高濱 京佑、武田 有生、田村 留佑久、恒次 祐希、中林 唯織、長井 結

西川 陽菜、西嶋 亜央衣、野中 陽、林 美佳、富士川 聡、本田 眞子、前田 剛、間瀬 向日葵、矢野 将吾、原 弘輝

『姫路城大天守登城支援』project!!

～「誰かの、やりたいけど、できないこと」～

関西福祉大学 社会福祉大学 演習Ⅱ 熊野ゼミ・水野ゼミと有志一同

【概要】

重度障害支援センター「ルルド館」に入所されている男性と女性の方のご希望に寄り添い、姫路城天守閣登城支援を実施しました。

また、天守閣のふもとにおいて、観光に来られた方を対象に、今後の登城の在り方について、4か国語でのパネルアンケートを実施しました。



最重度の障害がある方の姫路城天守閣の登城支援を通じて、「誰かの、やりたいけど、できないこと」を支援することを体験し、私たちが見ることができた景色、学んだこと、得た経験を紹介するものです。

【報告の概要】

- ① 世界遺産・国宝である姫路城の大天守最上階への登城を希望する重度障害者の願いの実現に向けた取り組み
 - ・ルルド館での現地の方との顔合わせ
 - ・ゼミでの搬送訓練
 - ・消防署での実践搬送訓練
- ② 姫路城に誰もが登れるようにするために支援する

【取り組みの背景・動機】

- ・演習Ⅱ(コミュニティ・アワー)として、どのような地域課題に取り組むべきかを検討する中で、「姫路城の登閣に取り組みたい」として合意形成
- ・共生社会の実現ではこの取り組みは、障害を持つ方々が健常者と同じように歴史的な場所を楽しむことができる社会を目指している。

【姫路城の沿革と現状】

- ・現在の姫路城は、池田輝攻が徳川家康から西国を牽制する命令を受け、1601年からの大改修で完成
- ・1928年指定史跡、1931年旧国宝(重要文化財)指定
- ・1951年国宝指定、1993年世界遺産登録(世界文化遺産)
- ・天守閣(大天守)は5重6層宇、階段は1000段程度
- ・観光客年間95万人

(現地検証)

- ・姫路城は、天守閣までの高低差が大きく、段差も多い。
 - ・天守閣ふもとから“車いすは使用できない”(禁止)
- 最上階到達は困難(6人は最低必要か)

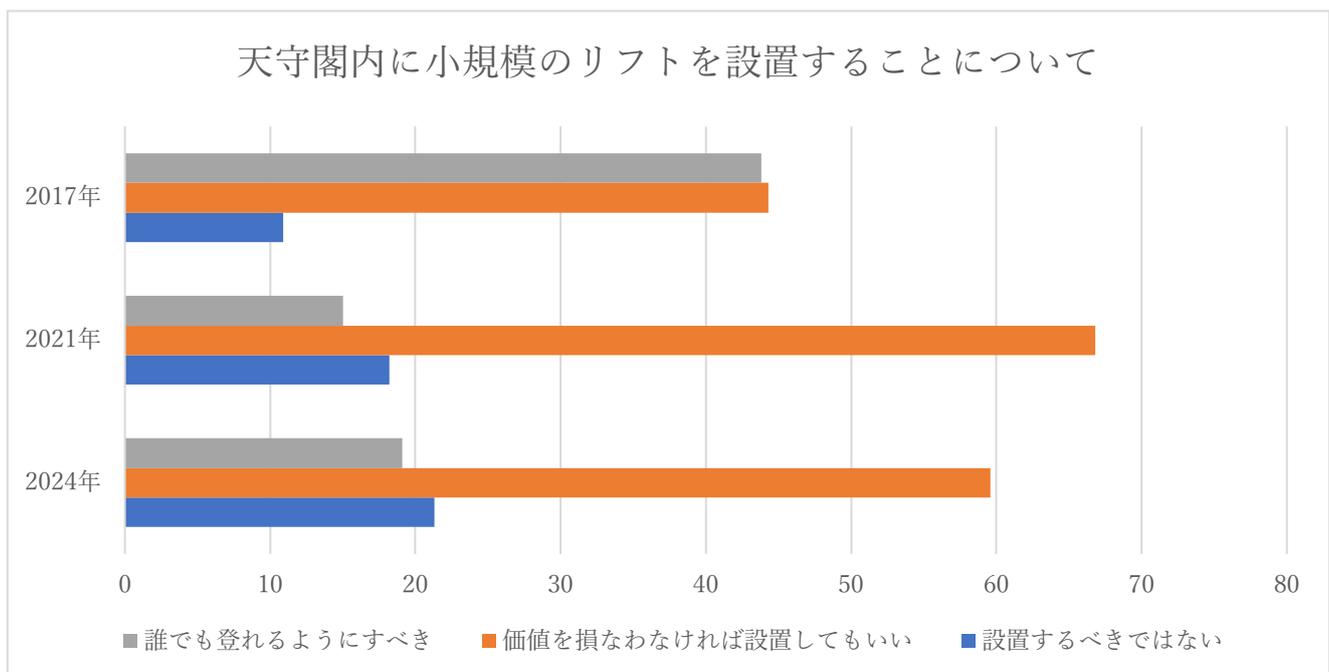


これまでの取り組み

4~5月	取り組むべき課題の選択
6~8月	農福連携活動 大学内での搬送訓練
9~10月	ルルド館訪問 さくらこども園で子供たちと交流 消防署での搬送訓練
11月	姫路城登城支援、アンケート実施 報告書作成



【パネルアンケート結果】



結果の通り遺産としての価値を損なわなければ設置してもよいと答える人が多数である。
今後、小規模のリフトの設置を考えていかないといけない。

私たちからの提案～むすびにかえて～

登城支援・パネルアンケートを終えたいま、私たちは以下のことを提案します。

短期【実施に大きな負担・変更等を伴わないもの】—合理的配慮の提供

- ① 登城に関する現行規程の見直し→経費 0 円
- ② 景観を損ねない途中休憩用の木製いす等の設置！→経費僅少
- ③ 階段昇降を補助する介助具の常備（いす担架）→経費 2 万円/台

中期【検討を経て構築すべきもの】—人的資源の確保等

- ① 安定的・持続可能な人的支援体制の構築（学生団体等との連携協定）
- ② 登城支援資機材の改良・開発（安全性向上に向けた企業連携）

※相互理解に向けた意向等の把握～情報発信

長期【10～20 年スパンで検討を進めるべきもの】—抜本的な環境改善等

- ① 世界遺産かつ観光資源としてのあり方の検討
- ② ユネスコ・文化庁との協議（小規模改修の是非について）
- ③ 姫路城を媒体とした相互理解・相互交流の推進（新たな役割）（参考：障害者差別解消法）

障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律

第四条 国民は、第一条に規定する社会を実現する上で障害を理由とする差別の解消が重要であることに鑑み、障害を理由とする差別の解消の推進に寄与するよう努めなければならない。

第五条 行政機関等及び事業者は、社会的障壁の除去の実施についての必要かつ合理的な配慮を的確に行うため、自ら設置する施設の機造の改善及び設備の警備、関係職員に対する研修その他の必要な環境の整備に努めなければならない。

第七条 行政機関等は、その事務又は事業を行うに当たり、障害を理由として緊害者でない者と不当な差別的取扱いをすることにより、障害者の権利利益を侵害してはならない。

2 行政機関等は、その事務又は事業を行うに当たり、障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合において、その奥施に伴う負担が過重でないときは、障害者の権利利益を侵害することとならないよう、当該障害者の性別、年齢及び障害の状態に応じて、社会的障壁の除去の実施について必要かつ合理的な配慮をしなければならない。

10？ 20？ 年後の未来がより優しく、より良い社会でありますように・・・



車椅子での入店
かみや製菓本舗のスタッフのご厚意により、スムーズに店内に入ることができました



8歩目でハイタッチ（エイトカウントタッチ）
宮前地区集会所。一定のリズムで歩き、8歩目でハイタッチする運動を楽しみました。



キーワード発表後の記念撮影
前期の最終回のゼミで、それまで自分達が学んできたことを振り返り、共有しました。



車椅子体験でバリアフリー調査！WheeLog!に記録へ
WheeLog!の情報充実へ。グループで、実際に車椅子でルートを走行・記録しました。

地域共生のまちづくりへ

今回の連携活動で、作業療法学生は、車椅子ユーザーに対する社会全体の意識の低さを感じたようです。例えば、エレベーターのボタンの位置が高く手が届かなかつたり、お店の人が車椅子の利用に慣れていなかったりといった点です。一方、社会福祉の私たちもその点について同感で、バリアフリーという言葉はよく聞かれますが、まだまだ改善の余地があると感じました。それ故に、特に、地域住民の意識を高めることが重要だと考えています。また、車椅子ユーザーの方々の方がより良い生活を送れるよう、共に協力していくことが大切であるという共通認識を持ちました。



作業療法理解の一助として雑誌や広告の写真を切り取り、一つの作品を制作している様子です。



車椅子のタイヤが線路の溝にはまらないように注視しながら走行している場面です。



各班が車椅子で進むルートが被らないように、班長同士で割り合わせを行いました。



WheeLog! の体験に備えて、車椅子を使いこなせるよう、準備を進めています。



作業療法専門学生とグループで自己紹介などを行いました。向かって左手は赤堀将幸先生です。



職種間連携でグループに分かれて活動した成果の発表会で配布された報告冊子（全39頁）です。





路上生活者支援

路上生活者を見守り、生活再建を支援する民間団体「路上生活者ふれあいサークルレインボー」。2002年11月に発足し、姫路市内で公園や駅周辺で暮らす路上生活者の安否確認、生活相談、食事を提供する活動を毎月第2土曜と第4木曜に実施している。2017年から谷川ゼミは毎年炊き出しに協力しており、2019年にはフードバンクあこうとの初のコラボが実現した。このゼミ活動は8年目を迎えている。今年度、私たちは2024年10月12日と11月9日の2日間、炊き出しに協力した。



人とのつながりやコミュニケーション

活動を通して、私たちは食料の調達から調理、配布までを経験し、路上生活者の現状やニーズを深く理解しました。具体的には、食材の量を計算する難しさ、効率的な作業分担、参加者とのコミュニケーションの大切さなどを学びました。また、路上生活者の方々との直接的な交流を通して、感謝の言葉や具体的な要望を受け、支援活動のやりがいを感じるとともに、より効果的な支援のあり方について考える機会となりました。今回の活動で得られた教訓は、支援活動は単なる物資の提供だけでなく、人とのつながりやコミュニケーションが重要であるということです。



支援の現場で得た気づき

50人の炊き出しや物資の配布を通して、さまざまな気づきを得ました。たとえば、「ただ生活保護を受ければいいというものではない」こと、「全員が同じように困っているわけではない」ということを知りました。また、支援活動を通して、「人とのつながりの大切さ」「物事を多角的に見ることの重要性」を学びました。自分自身の成長に繋がりました。



「私たちが紡ぐ新たな関係性」

車椅子街歩きで 初めて知った世界は
 段差たった一つが 大きな壁に
 世代を超えた体操 温かい絆結んで
 心も体も一つに 言葉の壁越えてく

作業療法と社会福祉が手を取り合って
 それぞれの強みを活かした取り組みだった

車椅子ユーザーの 心の叫び
 バリアフリーな世界 共に作ろう
 いつか誰かのために きっとなるよ
 みんな笑顔になれる そんな未来へ

路上で暮らす人たち 寂しさを見過ごせない
 分け合える喜びが 灯をともし
 それぞれの想いを抱きしめながら集まる
 お米の一粒一粒に感謝の気持ち

フードバンクを訪れて 知った活動
 食べ物大切さ それに命のつながり

一人ひとりの手で 未来を築く
 希望の種をまこう 花を咲かせよう
 いつか誰かのために 声をあげるね
 不平等な社会を 変えていこうね！

© Kazuaki Tanikawa and the wonderful 2nd year seminar members 2024.11.21

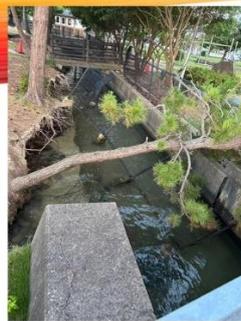
ちっぽけな僕にできること

社会福祉学部 社会福祉学科 二回生 萬代ゼミ

概要

- プロジェクト名: 能登半島地震復興支援ボランティア
- 派遣期間: 8月8日～8月11日
- 派遣場所: NPO法人紡ぎ組(石川県輪島市深見町)
- 派遣人数: 20人[ゼミ生: 16,ゼミ外生: 3,教員: 1]
- 費用負担等の情報: 助成金、自己資金、その他(参加費7,000円)

石川県 輪島市 深見町▶



今日生きれてること、帰る場所があることを日々忘れず生きてほしい。復興には時間がかかる。私たちが、普通に生きてる今も自らの町を元に戻すために頑張っている人がいることを忘れずに生きてほしい。

地震の後は家には戻らない。
人はすぐ死ぬ



地震を体験した人から色々な話を聞き、ボランティアをする中で知識を得ることができた。



家が崩れたのがトラウマで家のがれきを撤去出来ない人がいる。人は簡単に死んでしまうので、平和ボケしないことが大切。



災害の起きた場所の物を買ったりその県に遊びに行ったりすることもボランティアになる。



地面をまっすぐ歩けること、塀が倒れておらず道が通れること。これらの普通が突然普通でなくなる恐怖を感じた。

「少しずつメディアでも報道されなくなり、国からの支援も満足に受けられない現状にまるで見放されてしまったように感じる」と言われていて、心が苦しかった。



現地の被災状況を見て、日ごろから防災用品を準備したり、避難経路を確認するなど防災意識が高まった。

テレビや、スマートフォンなどでは感じられない現地の人の生の声を聞き、ガスや水道がすぐ使える当たり前の環境が奪いことがわかった。



簡易トイレ訓練

簡易トイレの使い方や、凝固剤を使えばすぐ固まることを学んだ。

炊き出し訓練

赤穂防災士の会の金井さんから、避難所設営のアドバイスをもらった。

集合写真

1	小野 悠介	社会福祉学部	2年生
2	加藤 結依	社会福祉学部	2年生
3	金田 大和	社会福祉学部	2年生
4	橋 廉人	社会福祉学部	2年生
5	久保 悠矢	社会福祉学部	2年生
6	高山 瑛巳	社会福祉学部	2年生
7	田別 直也	社会福祉学部	2年生
8	中井 嘉人	社会福祉学部	2年生
9	中塚 嘉彦	社会福祉学部	2年生
10	花倉 佑奈	社会福祉学部	2年生
11	花戸陽菜穂	社会福祉学部	2年生
12	松本 龍馬	社会福祉学部	2年生
13	真鍋 一希	社会福祉学部	2年生
14	山内 蓮	社会福祉学部	2年生
15	山際 達也	社会福祉学部	2年生
16	藤木 亮輔	社会福祉学部	2年生
17	竹内 智哉	社会福祉学部	3年生
18	大串 華加	教育学部	2年生
19	吉本 好祐	教育学部	2年生
20	萬代由希子	社会福祉学部	教員

感想/学び

現地に足を運んで、自分たちの目で震災状況を見て、メディアで見るとはまた違ったものが見えた。想像以上に道路や山、家屋などが崩壊しており、手付かずのところがまだまだあった。その一方で海も山もあり、とても自然豊かな場所でもあった。震災前はもっと綺麗で豊かな場所だったと考えると、当たり前前に暮らしていた家や町、日常などが簡単になくなってしまっただとわかった。ボランティアの最後に佐藤克己さんに震災時のお話を伺い、今の平和な日常が本当にありがたいことだと再確認した。

今日の日本ではいつ災害が起きたとしてもおかしくない。「平和ボケ」せず、災害に備えておくことはとても大切だと今回の支援活動を通して学ぶことができた。

テーマ「WELL-LINK プロジェクト」始めました!-知る・つながる・支え合う-

【前期の活動】 課題の発見（調べ学習、見学、ゲストスピーカーの招聘）

✦ 障害児・者支援グループ：障害者のライフサイクル

メンバー：岩田峻、瀬尾康介、高松琉菜、濱本珠希

障害者がライフステージごとにどのような生活を送っているのか、主に就学時や中学校から高校、高校から社会人などの転換期に焦点を当て、障害者のライフサイクルについて調べ学習を行った。また特別支援学校の見学やゲストスピーカーの話から転換期の課題として以下が挙げられた。

就学時

- ◆ 進学先の選択（特別支援学級 or 特別支援学校）
 - ・特別支援学校⇒地域との関わりが減少・地域住民の理解の低下

卒業後

- ◆ 余暇の質
 - ・学校を卒業した後は個人に時間の過ごし方が任されている。他者との交流に加えて、自分ひとりで「余暇」の過ごし方も探していくことも必要になる。

就労時

- ◆ 就労時のトラブルの相談
 - ・トラブルがあった際の責任が、親から本人へとシフトしていく。
 - ・相談できる相手を見つけ、自分から自発的に相談したり、相談しやすい環境が求められる。

✦ 複雑な生い立ちを抱える子ども支援グループ

メンバー：大牛泰和、岸上 咲花、近藤 かのん、松岡 美紅、松下 瑛花、横山 琴音

無戸籍問題について

【無戸籍によって起きる生活上の問題】

遺産相続ができない、パスポートが取れない、運転免許が取れない、選挙権を行使できない、銀行口座が開設できない、家を借りることができない、マイナンバーカードが取れない、進学に不便を強いられる、就職に不便を強いられる、国家資格取得に不便を強いられるなど。

【主な戸籍になる原因】

- ①民法 772 条による「嫡出推定」 ②一定の条件下における外国籍の親の出産 ③親自身の都合
- ④両親不明、身元不明人など ⑤行政による戸籍滅失

【無戸籍者の人数に関する実態】

無戸籍という問題の特性上、その全体像を完全に捉えることは難しく、推定では1万人程度とされているが、法務省が把握している人数は830名であり、発見までの難易度の高さがわかる。

ヤングケアラーについて

【ヤングケアラーとは?】

本来大人が担う家事や家族の世話などを日常的に行っている18歳未満の子ども。中学生で**17人に1人**、高校生**24人に1人**程度が推定されている。

【ヤングケアラーが抱える困難と支援の現状】

精神的負担、ケアと学業との両立の困難。日本では、「早期発見・把握の取り組み」や「相談支援」、「家事育児支援」、「介護サービスの提供」などが実施されている。神戸市では全国にさきがけて、「**子ども・若者ケアラー担当課**」を設置し、相談窓口や当事者同士が交流できる「**ふうの広場**」、訪問支援、配食支援などを実施している。

【支援の課題】

子ども自身が自分の家庭状況を当たり前だと思い、ヤングケアラーであることに無自覚であることが多い。そのため、周囲も確信が持てず、早期発見が難しくなる。また、家庭内のデリケートな問題とつながっていることが多いため、学校等も踏み込みにくく、表面化しにくい。ヤングケアラーに関する啓発・周知、学校や医療、福祉機関の連携が重要となっている。

児童虐待について

【虐待の通告とその対応】

児童虐待を受けたと思われる児童を発見したものは、市町村、都道府県の設置する福祉事務所、児童相談所への通告が義務付けられている。児相による調査の結果、必要に応じて、**児童に対する「一時保護」が行われるが、その割合は16%と低く、多くの場合は、家庭に戻り、「在宅における保護者援助」が実施される。**在宅援助は、保護者に対して、虐待の理解やカウンセリング、養育方法の指導などが行われる。

【里親委託・施設入所措置と児童の自立における課題】

家庭での養育が不適当と考えられる場合、**里親委託や施設入所措置等**が行われ、家族再生支援や児童への自立支援が行われる。**児童の自立時の課題として、高校卒業以降の進学率が低く、大人になる猶予時間の短さや複雑な家庭背景から、自立後に頼れる存在が少ないなどの課題が見られる。**

✚ 学校関係支援グループ

メンバー：岩川 祥輔、桶本 優希、尾崎 遥菜、川添 芙美、佐藤 優太、立石 隼斗、藤原 萌愛、八木 萌

不登校について

【不登校の現状】

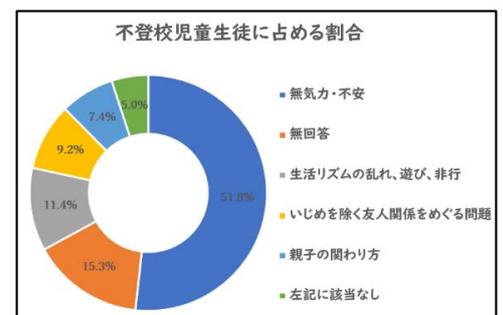
R4年度 299,048人(前年比約5万人増)

【不登校の要因】

「無気力・不安」が51.8%を占め、もっとも多い。明確な理由がないように見えるが、「気持ちの言語化が難しい」、「言語化する力はあるがしたくない」といった場合もあるため、理解しようとする姿勢、耳を傾けることが大切。

【不登校支援】

それぞれの状況に応じて、様々な支援がありえるが、フリースクール、定時制・通信制高校、学びの多様化学校(不登校特例校)など、多様な学びの機会を保障することが重要となっている。



令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒

指導上の諸課題に関する調査結果について

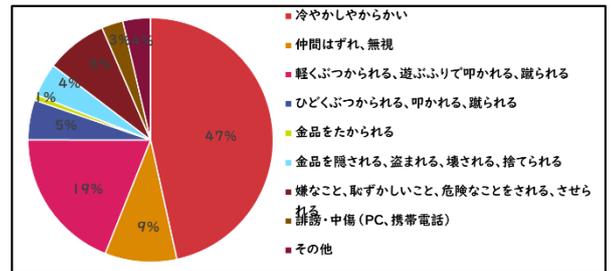
いじめについて

【いじめの現状】

いじめとは、一定の人的関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、心身の苦痛を感じているものを指す。R4年度の認知件数は、681,948件(前年比約6万6千件増)。

【いじめの様態】

右図参照。「冷やか・からかい」が約半数を占める。いじめの構造として、首謀者・被害者・観衆・傍観者から構成されると言われる。特に傍観者が多数を占めるため、間接的にはあるが、9割以上の人がいじめに関与しているとも言える。



【支援と課題】

相談としては、主に電話相談、SNS相談、教育委員会、警察等がある。課題としては、グループによる「いじり」からのいじめに発展するケースも多いため、被害者も周囲もいじめと認識できず、相談機関につながらず悪化してしまうことがある。

また右表に示されるように、海外と比べ日本では加害者に対する対応が不十分であり、根本的な解決には至りにくいということも課題である。

国	加害者対応
アメリカ	共感トレーニングなど
イギリス	加害生徒の親が教育に関する講習を受ける義務を負う
フランス	拘禁刑・罰金刑など犯罪とする
韓国	記録は大学入試に反映される 9段階に分けられ9号は退学処分
日本	学校内で対処

【課題の発見と解決】

様々な立場にある人が直面している困難な状況が、良く知られていないため、そのことが負い目となったり、スティグマとなることを恐れたりして、地域・社会とつながりにくい。また「つながり」も、ただつながればよいというわけではなく、負担になることもある。それぞれにあったつながり方を考える必要がある。



「WELL-LINK プロジェクト」 -知る・つながる・支え合う-

参加した人が、相互に理解し合う体験、つながる体験をし、それぞれの地域で「支え合う関係」を創り上げていってほしいことを目指すプロジェクト。「知る・つながる・支え合う」をキーワードに、次の3つの活動に取り組む。

児童養護施設や里親の下で育つ子ども応援プロジェクト

夢かたり合い交流事業

スクールソーシャルワーク教育課程

親子交流事業

障害者レクリエーション・スポーツ交流事業

らくスポ

夢かたり合い事業(児童養護施設や里親の下で育つ子ども応援プロジェクト)

夢かたり合い事業とは、児童養護施設に入所する児童が大学生との交流・語り合いを通して、大学生活や学ぶことの意義などを知り、進路選択を考える機会とすることを目的としている。特に将来の進路選択のモデルとして大学進学という選択肢を持てるようになること、ひいては積極的に将来の夢を描けるようになることを目指す。参加者は、7施設、児童21名、職員6名。



【活動プログラム】

- オリエンテーション 自己紹介ワーク
- 食堂ランチ体験
- 語り合いプログラム「大学生に聞いてみよう」
- 大学生生活体験(オープンキャンパスツアー)



子ども虐待防止の「オレンジリボン運動」にちなんでオレンジのTシャツを

着用しました

親子交流行事について(スクールソーシャルワーク教育課程)

赤穂市内の小学校に通う児童とその保護者を対象とし、親子相互の交流を図り、その絆の深まりを促進できるようなイベントを開催することで、地域子育て支援に貢献することを目的としている。SSW教育課程の4年次生と協働で開催。



今年度は「わんだりんぐワールドツアー」と題して、「魔法の世界」を舞台に、親子で協力してクリアする4つのアクティビティを企画。

アクティビティ①「わんだりんぐ・ワールドの住民になろう!」

わんだりんぐ・ワールドの住民になるために、マント、帽子、魔法の杖を作成。

アクティビティ②「なぞなぞフィッシング!」

ごみを釣ってなぞなぞを解き、水の精霊に仲間になってもらう。

アクティビティ③「ドキドキ!ハラハラ!カードをめくって、クロスワード!」

クロスワードを解いて知の精霊にも仲間になってもらう。

アクティビティ④「投げて、落として!フルーツ、ゲット」

動く木の精霊をめがけてボールを投げて、実を实らせることで、木の精霊に仲間になってもらう。



アンケート結果としては、満足度 **94%**、次回の参加希望度 **88%**でした。すでに **10年以上**、**続いているイベント**であり、**地域に根差しているが、継続が課題**。

障害者レクリエーション・スポーツ交流事業「らくスポ」

町のみんが楽しく熱くなれるイベント「らくスポ」に参加し、「ざわざわの森」を担当した(詳細は報告会で説明します)。「らくスポ」は、**障害の有無に関係なく、相互の理解のために、誰とでも、誰もが交流し、楽しむことをバリアフリーにするイベント**です。さまざまなアクティビティに参加し、**障がいのある方の日常世界**を体験することで、みんなの「**そうだったのか**」を生み出します。私達が担当した「ざわざわの森」以外にも次のようなアクティビティが企画されました。

カンパイ・イン・ザ・ダーク



アイマスクをつけた状態でテーブルに座り、ほかの人とカンパイするゲームです。
視界がふさがっている状態で乾杯をしようとする中で、目が見えない人に対して具体的なかつ適切な伝え方を体験することができる。

白杖でダンボール迷路



アイマスクをつけた状態で白杖を使いながら迷路から脱出するゲームです。
見えにくい人にとって、あいまいな説明では場所や位置を伝えることは難しい。また、道路や通路に置かれているものがとても危険なことがあるのを体験できる。

【全体のまとめと課題】

- ◆ 「知る・つながる・支え合う」をキーワードに活動を行ってきたが、「つながる」「支え合う」はなかなか難しく、人によっては負担になることもある。
- ◆ 「自分達で調べる」「当事者やサポートを行っている人の声から学ぶ」「実際に体験してみる」など「**様々な知る**」を行うことが、「**つながり方を見つけること**」やそれぞれの「**支え合いの形を発見すること**」になるのではないかと考えた。

現代の精神保健福祉 ～人々を繋げるシルバーリボン～

網本竜喜 伊藤奨太 色波凜汰郎 大倉妃南子 大谷崇翔 岡山優菜 北出拓也 坂根功太郎 高崎聖矢
高砂晴斗 高原碧彩 田中亜実 中西脩晴 原村一花 藤平歩夢 前島瑞樹 前田愛依 山名大喜〔平林ゼミ〕

目的・方法

精神病と聞いてあなたはどのようなことを思い浮かべますか。

「そんなことを言われても目に見えないのだから分からない」「当事者の気分の問題だ」「自分には関係ない」
残念ながらこのように思う人達は少なくありません。

現代では教科書にも掲載されるようになった精神疾患を私達はもっと重く受け止めるべきであり、知ることで
いつか誰かの命を救うことができるかもしれません。だからこそ私たちのゼミは精神保健福祉について深く学び、
正しい情報を発信していくことを目的として前期・後期を通して活動してきました。

その集大成として、10月10日の世界メンタルヘルスデーに合わせて、10月5日に開催された大学祭にてメ
ンタルヘルスについて考えてもらうイベントを行いました。

活動内容

1. 高校の保健体育のテキストを通読して話し合い

子どもたちが「心の病」についての正しい知識を持つことで予防や対処法を知り、早期治療や病気に対する偏
見の解消につなげようと2022年度から高校の保健体育の教科書に精神疾患についての記載が40年ぶりに復活
しました。

「新高等 保健体育」「現代 高等保健体育」「高等学校 保健体育 Textbook」の教科書を全員で通読し、
良かった点や注目した点、イラストや図にも注目し意見を出し合い理解を深め、知識の伝え方や表現の仕方につ
いて考えました。

2. さまざまな分野の普及啓発活動

精神保健福祉分野に限らず、さまざまな分野の普及啓発活動について調べ、個別発表をしました。

人権問題、環境問題、道路交通問題、スマートフォンの利用や迷惑メール、献血、感染予防、ボランティア、
男性の育児休暇、認知症、児童福祉週間、選挙、アール・ブリュット、生成AIなど、さまざまな分野における普
及啓発の取り組みが紹介され新しい発見がたくさんありました。プレゼンテーションもお互いに学びあいながら、
回を重ねるごとによくなっていきました。

全員の発表終了後は、今年度取り組む普及啓発活動の内容についてグループで検討しました。

3. 当事者講話と普及啓発イベントに向けての意見交換

疾病を抱えながら地域生活を送る当事者の講話を通して、地域生活の実際や生活を継続していく中での困難、これからの希望などについての理解を深めました。講話の後は、ゼミで検討している普及啓発活動のアイデアをお伝えし、当事者及び支援者と意見交換をさせていただきました。



4. 世界メンタルヘルスデーの普及啓発イベント

10月10日は、**世界メンタルヘルスデー!!**

世界メンタルヘルスデー：世界精神保健連盟が、1992年より、メンタルヘルス問題に関する世間の意識を高め、偏見をなくし、正しい知識を普及することを目的として、10月10日を「世界メンタルヘルスデー」と決めました。

シルバーリボン：脳や心に起因する疾患（障害）およびメンタルヘルスへの理解促進を目的とした運動のシンボルです。

今回大学祭で、メンタルヘルスについて考えてもらうイベントを開催しました。

【イベント内容】

- ・こころの健康統一ダイヤル（厚生労働省）とシルバーリボンのロゴ（SILVER RIBBON JAPAN）が記載されたキーホルダーの配布
- ・プロジェクターでメンタルヘルスの情報発信（YouTube：厚生労働省制作）
- ・精神疾患に関する二択クイズ
- ・世界メンタルヘルスデーや精神疾患に関するポスター展示
- ・NPO 法人東備によるブース
- ・メンタルヘルスに関する絵本や漫画の展示
- ・キーホルダーに付けるチャームを作れるブース
- ・シルバーリボンの顔はめパネル
- ・歴代のゼミ生が作った普及啓発に関する成果物の展示と配布
- ・一言メッセージコーナー
- ・アンケートの実施



【具体的な内容】

- ・精神疾患に関する二択クイズ
 - ➔児童・成人・高齢の3つのジャンルに分けた○×クイズができるコーナー。
- ・世界メンタルヘルスデーや精神疾患に関するポスター展示
 - ➔「こころの病気のサイン」「メンタルヘルスの予防」などの情報提供。
- ・NPO 法人東備によるブース
 - ➔当事者の方が作業や活動の中で作成したさまざまな作品やその一部、シルバーリボンの公式グッズなども販売。 Ex) 手作り小物、木工アクセサリ、トートバッグなど。
- ・メンタルヘルスに関する絵本や漫画の展示
 - ➔紹介したい絵本やマンガを選び、本のPOPや帯を作成。それぞれ手に取りたくなるキャッチコピーが書かれている。
- ・キーホルダーに付けるチャームを作れるブース
 - ➔体験コーナー。入り口でもらったキーホルダーに好きなチャームを付けることで、オリジナルのキーホルダーにできる。
- ・シルバーリボンの顔はめパネル
 - ➔シルバーリボンをかたどった顔はめパネル。軽量のため、子どもが自分で持つことができる。
- ・歴代のゼミ生が作った普及啓発に関する成果物の展示と配布
 - ➔カレンダー：当事者の方が描かれた絵や作品が毎月掲載されているカレンダーには、福祉に関する記念日が記されている。絵本：精神疾患を子どもたちに正しく理解してもらうための絵本など。
- ・一言メッセージコーナー
 - ➔来場された方々の思いや希望が、メッセージやイラストなどで表現されている。

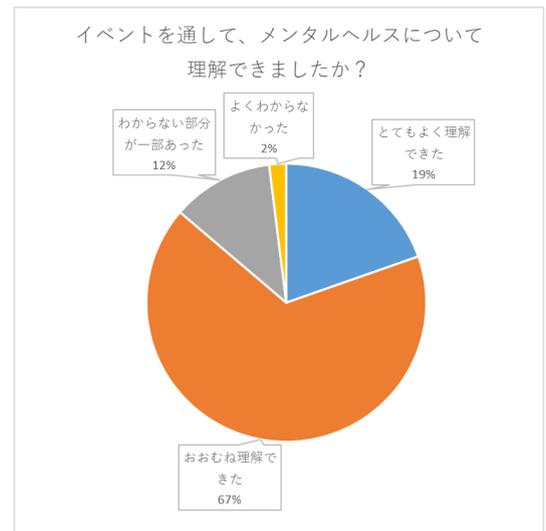
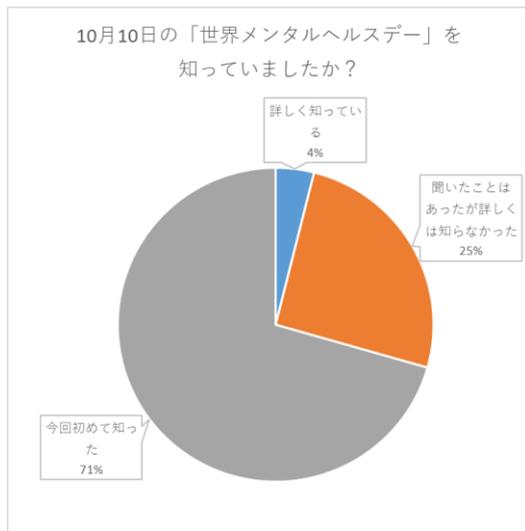


【来場者アンケートについて】

- ・全体の来場者数 134人
- ・アンケート回答者数 51人

【イベントを訪れた方の感想】

- ・初めて参加しました。様々な工夫があり、シルバーリボンのことを知れてよかったです。
- ・キーホルダーづくりがすごく楽しかった。また来たいです。
- ・小さい子でもできるので良かったです。
- ・メンタルヘルスデーという言葉を知りました。若い方がこの活動を積極的に参加されていることが素晴らしいと思います。
- ・利用者の方が作られているものもあってよかったです。



まとめ

【イベントを開催して気づいたこと】

- ・子どもからお年寄りまで、幅広い年齢層の方が思っていたよりたくさん来てくれた。
- ・グループで活動することの楽しさや声かけ、その方法を工夫することが大切だと思った。
- ・クイズコーナーで子どもが「フリガナがないから読めない」と言っていた。親子を対象にしていたので、フリガナはあったほうがよかったと思う。
- ・絵本コーナーでは、子どもより大人が足を止めていることが多かった。もう少し親子でゆっくり絵本を読むようなスペースをとっても良かった。
- ・誰かが手にキーホルダーを持っているのを見て「どこでやっていますか」とお客さん同士で情報共有している場面を目にしたので、配布したものが宣伝につながっているのかなと思った。

【一年間の活動で感じたこと】

- ・ポスター、本の帯や POP 制作を通して、本を読んだり、インターネットで調べたりした。今まで自分が知らなかったさまざまな知識を得ることができ、情報を発信する側も成長することができた。
- ・大学でこの普及啓発活動は初めてとのことで、何をすればいいのか、どうしたらもっとよくなるのかを考えるのが大変だったが、なるべく積極的に参加してみてよかった。これを生かして今後の活動ももっとスムーズにいけるように考えていきたい。

【今後の展望】

- ・ライブ前など大きなイベント前では特に入客数が多かったので、そのタイミングを狙って宣伝に力を入れると集客できる可能性を感じた。今後の課題としたい。
- ・これからもゼミの活動や授業で、精神疾患についての理解を深めて発信していきたい。
- ・今後も親子を対象に精神保健福祉の普及啓発をしていくことはよいのではと感じた。また、その手段として絵本は有効だったと思うので、その生かし方を検討することが必要である。

<謝辞> 趣旨にご賛同いただいた SILVER RIBBON JAPAN および厚生労働省の皆様のご厚意により、本イベントにてロゴやイラスト等が使用できました。心より感謝申し上げます。

コミアワ学生代表者会議名簿

～2024年度コミュニティアワー報告会実行委員会 名簿～

原ゼミ

岡 坂 健 吾
武 田 有 生
恒 次 祐 希
長 井 結

水野・熊野ゼミ

赤 杖 杏
宇 野 若 菜

谷川ゼミ

朝 田 乙 爾
前 田 夢 仁（実行委員長代理）

萬代ゼミ

松 本 颯 馬（実行委員長）
楠 廉 人

高田ゼミ

岩 田 竣
大 牛 泰 和
立 石 隼 斗（副実行委員長）

平林ゼミ

伊 藤 奨 太
北 出 拓 也

2024年度コミュニティアワー報告会 プログラム・レジュメ集

令和6年12月

編集 コミアワ学生代表者会議

発行 関西福祉大学社会福祉学部

〒678-0255

兵庫県赤穂市新田380-3

協力 関西福祉大学社会福祉学部研究部会

印刷 小野高速印刷(株)

いつか、誰かのために。

KANSAI UNIVERSITY of SOCIAL WELFARE